

Hello! FUJISEI

No.84

最近「看取りの場」という言葉をよく目にするようになってきました。5人に1人が65歳以上という超高齢時代を迎える日本では、長くなった人生の最期をどのように迎えるかへの関心が高くなっています。

死亡場所は、戦後一貫して自宅から病院へと変わってきましたが、この数年は傾向に変化が見られ、自宅での死が少しずつ増えてきました。特に、がん末期については、在宅での死亡が最近5年で3割くらい増えてきました。

人生の最期をどのように迎えるかについては、「畳の上で死にたい」という言葉に表されるように、「自宅で」と答える人が多いと思います。

ところが、人口動態調査における「死亡した場所」によれば、病院を含む施設での死亡は約88%、自宅は約12%にすぎず、現実と思いの間には大きなギャップがあることがわかります。

実は、昭和26年調

「看取りの場」は自宅か病院か

超高齢社会！ 人生の最期をどこで迎えるか

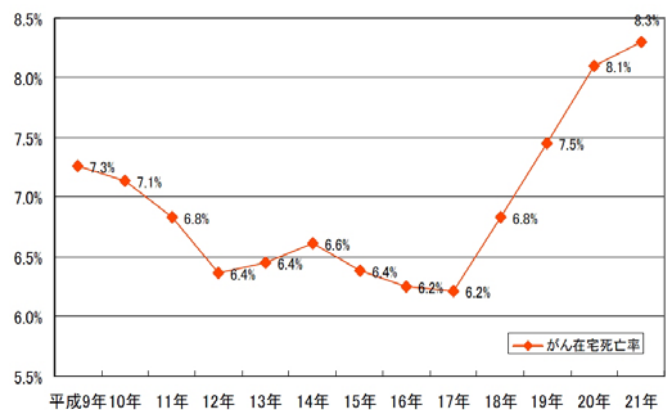
査での死亡場所の自宅と病院等の比率は約82%対約18%と現在とはまったく逆になっており、50年を経て死

亡場所の比率が逆転したことがわかります。現実はこのように逆転していますが、思いは依然として50年前のままなのです。

自宅で療養し、在宅での死亡を願っても、医療・介護の条件が整

わないために、やむなく看取りの場として病院等になっているとも言えます。

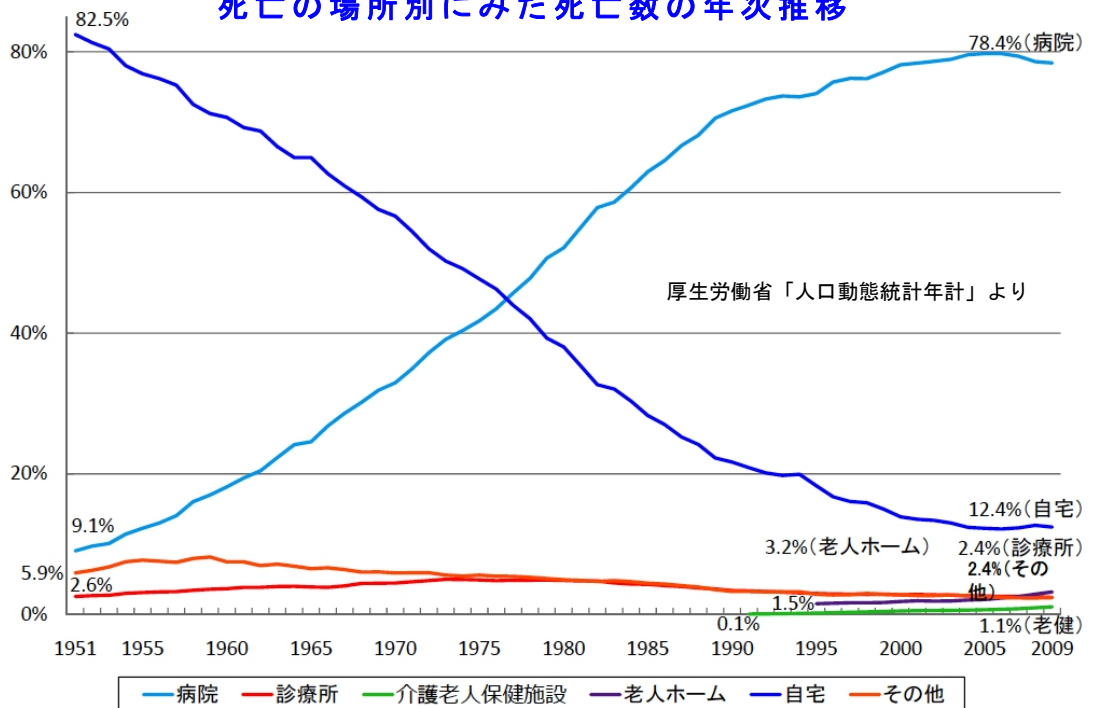
がん在宅死亡率の推移



厚生労働省「中央社会保険医療協議会 資料」より

厚生労働省「中央社会保険医療協議会 資料」より

死亡の場所別にみた死亡数の年次推移



厚生労働省「人口動態統計年計」より

— 病院 — 診療所 — 介護老人保健施設 — 老人ホーム — 自宅 — その他